MfG_J_Gan-gi_Yukiguni

「T-2-6 長岡の雁木、県内に残る雁」木の追記

1. 序

2. 高田、長岡の雁木について

3. 宮内商店街の雁木

参考　2017年1月27日 日経　　高田の雁木通り
高田の雁木通りパンフ

1. 序

1960年代まで、市街地に消雪パイプが普及する前は、雪国の街にとって雁木は必須でした。 積もった雪は道の両側に二階より高く積まれ、その雪の山と、家々に挟まれた間にある雁木通りが、冬季の安全な歩道でした。

2. 高田、長岡の雁木について

雁木が残っている町は、高田が日本一、長岡は2番目だそうです。
私が子供のころ、大手通りから昭和通りまで雁木が続いていて、傘は不要でした。
今は、中心市街はアーケードですが、スズラン通りを過ぎるころには、駐車場や空き地が増えて、雁木がないところが増えました。
摂田屋近くの宮内商店街も、近年多くの家や商店が駐車場になり、雁木が激減しています。
枋尾、与板など、周辺の町には、長い雁木通りがまだ残っています。
長岡の隣の市、小千谷市も中心部はアーケードですが、雁木通りも残っています。 特に市民会館から慈眼寺のあたりには、昔ながらの、本当に昔の長岡の雁木を思い出させる、雁木通りが残っています。 慈眼寺を探す途中に見つけ、懐かしく感じました。

基本資料
近世における雁木通りの建設整備過程（土木学会論文集_1997）
～江戸初期からの整備過程の表があります
高田の雁木パンフレット ～越後高田雁木ねっとわーく 発行(部分)
～高田雁木の歴史と現状が簡潔に書かれています
170121_高田の雁木通り
～（日本経済新聞2017年1月）

その他の参考資料
～ ネットで検索すると、
すぐ見つかると思います。

雪国が育んだ雁木の再整備手法に
　　関する調査について_
　　国交省北陸地方整備局(2007
近代における雁木通りの
　　構成要素について
　　（土木学会論文集_2014）
とちおまちめぐり雁木のページ
塩沢・牧之通りの雁木
　　と町並み保存

高田の雁木

菅原,波多野、近世における雁木通りの建設整備過程

表-1 近世における雁木通りの建設整備過程

	弘前	八戸	長岡	高田	糸魚川
慶長 9年(1604) 16年(1611) 19年(1614) 元和 3年(1617) 8年(1622) 寛永元年(1624) 7年(1630) 19年(1642) 寛文 9年(1669) 天和元年(1681) 2年(1682) 3年(1683)	・築城，町建設。 四代藩主津軽信政が小見世の建設を奨励[17]。 ・小見世，道路上に建設。	・町が完成。	・堀直竒築城 ・初代藩主牧野忠成が町割。 ・同年の記録から，元和3年～元和8年の間に雁木通り建設。（屋） 統一した雁木通りの建設。 ・（屋）	・松平忠輝築城，町の建設開始。 松平光長時代(1624～81)に雁木通りが建設されたとされる[1]。	・築城，町割は寛文以前。
元禄13年(1700) 宝永 5年(1708) 元文元年(1736) 4年(1739) 5年(1740) 寛保 3年(1743) 宝暦元年(1751) 2年(1752) 4年(1754) 6年(1756) 8年(1758) 明和 2年(1765) 安永 6年(1777) 天明 4年(1784) 8年(1788) 寛政 4年(1792)	小見世屋根上に・梯子を設置。（落） 18世紀前半の石場家における落し式の小見世。 雨・雪・暑夏の際には，武士も・小見世下を往来。 ・本町の小見世屋根，柿葺。 ・小見世の軒先に冬期に限り板戸設置。 ・小見世の幅は1間～9尺，本町（落二）	・小見世通りを確認。 ・小見世下の障害物の撤去。	裏町に仮設の雁木通り建設。 ・（道・落） ・表町に雁木の補充。（落）	雁木通りが当初の都市設計に含まれていなかった。（道・当落） ・溝の積雪による雁木の破損に対する注意。 ・公用の仕事場として利用する際に藩の許可要。 ・藩が通行の安全に配慮。 ・雁木の連続を町人が希望。	・大町に「ひさし」確認。 18世紀中頃に雁木通りの建設開始。 ・鉄砲町に雁木確認 ・横町に雁木確認。
文化 6年(1809) 9年(1812) 13年(1816) 文政10年(1827) 12年(1829) 天保11年(1840) 13年(1842) 14年(1843) 弘化元年(1844) 安政 3年(1856) 元治元年(1864)	・道路上における往来の妨げとなるため，小見世前の店先の延長を規制。	・大火後，小見世の幅を表町4尺，裏町3尺と定める。 ・表町に小見世が普及（二十三日町に確認）。（落）	柳原町西側と同 ・小町に雁木の建設を許可。 ・大火後，町全体に雁木通り建設。 ・『雪之図絵巻』などにより普及確認。（落二）	雁木下は，馬が荷物を引いていた。 ・出雲町名主西沢家の迫り込み式雁木下の土地は，私有地である屋敷地。 ・『越後土産 二編 全』には，城下東端の雁木通りが描かれる。（落二）	・看屋の小庇の許可申請。 ・大火後，整備。（屋・落） ・大火後，整備。看屋の，小庇および雁木下を整理。雁木先に雨落を確認。

3. 宮内商店街の雁木

It is characteristic that all storefronts of the shopkeeper-houses are faced to shopping streets of the town, and common roofs "Gangi" are built among these houses.

They are devised to live in long winter season with heavy snow fall.

It is about 500 meters from the crossing in front of the station to the next brock crossing near the Settaya-brewing industry zone (district), however width of the road is changed near a concrete building, which is now used as the Poster Museum.

To built Gangi, all the local people must offer a part of their private land for the public passage.
This is the spirit of give and take.

新潟

けの雁木は高さがまちまち
が面白い（新潟県上越市）

高田雁木通り（上越市）

雪よけのひさし、長さ日本一

2017 1/21

信越スポット

この冬、雪国らしい町並みを訪ねてみたいという人に、新潟県上越市の「高田雁木（がんぎ）通り」を薦めたい。雁木は立ち並んだ民家の軒先に連なる、雪よけのひさしのことだ。かつて日本海側で多く見られた光景だが、高田の雁木は総延長が16キロで日本一長いという。家によって高さが微妙に違うのもアクセント。独特のおもむきを醸し出している。

雁木の下はアーケードのように誰もが自由に通れるが、実は大半は私有地で公道ではない。譲り合わせに住む人々が冬場の通り道を確保しようと、玄関前のスペースをあけて公道沿いにひさしを掛けた。「江戸時代から続く、雪国ならではの助け合い精神の象徴だ」と地元の観光ボランティアガイド、柳沢勝也さんが教えてくれた。

雁木通りはえちごトキめき鉄道の高田駅前に広がっている。一番の見どころは江戸時代から繁盛を誇った「旧今井染物屋」や日本最古級の映画館「高田世界館」などが集まる駅の北東側だろう。個人宅はもちろん、昔ながらの呉服店や雑貨店なども軒を連ねる。効率よく回れば、1～2時間で様々なタイプの雁木を見て、歴史や仕組みを知ることができるだろう。

散策の合間には「町家交流館・高田小町」にも立ち寄りたい。明治時代の町家を改修した施設で、無料の休憩・案内所がある。館内のギャラリーでは大雪に見舞われた高田地区の古い写真なども展示している。

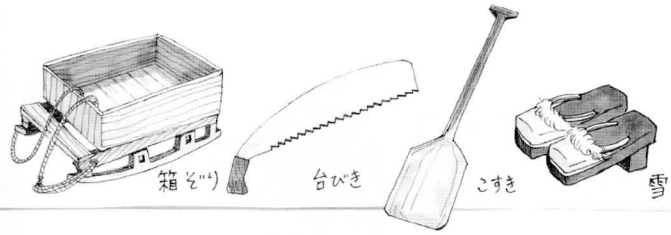
駅前の至る所で見受けられる雁木だが、最近は空き地が増え、歯抜け状態になっている場所も少なくない。間口が狭く奥行きがある昔ながらの町家も減ってきた。そんな中、地元で呉服店を営む6代目の小川善司さんは店舗をあえて昔風に改築し、高い吹き抜けや上品な雁木などを復元した。

「コンクリートだらけの町並みに風情を感じますか」と小川さんに問われた。雁木には確かに商店街の風情にはない味わいがある。

▽所在地＝新潟県上越市高田地区
▽交通アクセス＝えちごトキめき鉄道の高田駅下車が便利。上信越自動車道の上越高田インターチェンジから車で15分程度
▽上越市文化振興課＝☎025・526・6903

☎ 新潟支局 025-222-7547
長岡支局 0258-37-1000

高田の雁木 まめ知識



およそ16キロに及ぶ高田の雁木通りは日本一の長さ。「北越雪譜」にも登場し※1、城下町高田を象徴する景観であるとともに、「ゆずり合い・助け合い」の心が形になった文化遺産であるといえます。

雪と雁木

今でこそ小雪の年が続いていますが、高田のまちの降雪量の多さは、平野部の都市としては、昔から群を抜いていました。

なにしろ、あまりの大雪で家並が見えなくなってしまい、旅人のために、「この下に高田あり」と書かれた高札が立てられたという話が残っているほどです。

「雁木」は、そんな雪国の冬期間の通路として造られたもので、新潟県はもとより東北から山陰まで広く分布していました。東北の盛岡・弘前・黒石・角館の城下町では「コミセ」、山形の米沢・鶴岡・酒田では「コマヤ」と呼ばれています。明治期以降、時代の波にもまれ消滅した地方が多い中で、高田のまちには今日も圧倒的な日本一の長さの雁木通りが残っており、子どもたちや、お年寄りにも便利で安全な通路として使われています。

雁木のはじまり

寛保３年（1743 年）の記録によれば、高田城下で雁木が造られたのは、慶長 19 年（1614 年）の高田開府より後の松平光長公の時代（1624-1681 年）とされています。

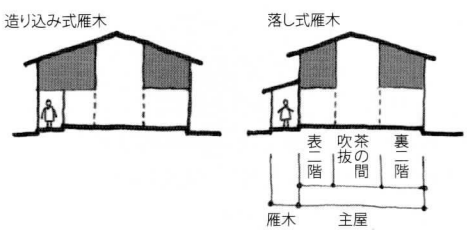
寛文５年（1665 年）真冬の大地震では、４ｍを越える積雪の重みも加わり城下全体が壊滅的打撃を受けましたが、地震の後に家老となった小栗美作は、幕府から借りた資金で城下町の復興事業を行い、この頃城下町に雁木が完備されたと言われています。

雁木の種類

初めの頃の雁木は、平屋の家屋の軒先を道路側に延長して柱で支えるだけのものであったと言われています。その後、建物の高さが高くなるにつれて、雁木の通路上部を物置などに利用できる「造り込み式雁木」の形態も生まれてきました。当初雁木上部の部屋は、窓もなく天井も低いツシ２階でしたが、後に窓をとって使用人の部屋などとして利用する家もあらわれました。明治以降になって本２階建ての町家が普及すると、表２階の採光と通風を確保するために、平屋の雁木を主屋に付け足す形の「落し式雁木」の形態が主流となっていきました。雁木自体は主屋にくらべて傷みが早いので、軽微な造りで容易に改修ができるようにとの工夫と考えられます。

雁木とまちづくり

雁木は、町家で生活を営む各戸が私有地を提供し、雪国における生活通路として重要な役割をはたしています。上越市が平成 15 年に行った市民アンケート調査では、「雁木と雁木通りの保存・活用が必要だ」という声は、市民の約 9 割にも上っています。しかし、雁木が形作られた時代とはライフスタイルが大きく変化する中で、雁木が次々と姿を消しているのも現実です。江戸時代以来約 350 年間受け継いできた高田のまちのシンボルをこれからどのように受け継いでいくのか。今を生きる私たち一人ひとりが考えていかなくてはなりません。



※1　北越雪譜は南魚沼市塩沢生まれの文人、鈴木牧之（1770-1842）の名著で天保６年に初編刊行。（岩波クラシックス所収）